

子どもの本関係者による支援・ 子どもの本を通じた支援

指田 和

2011年3月11日、それぞれの、あの日、あの時、そしてその後の衝撃――。

震災直後からしばらくは「命をつなぐための支援」が優先されたが、一方で、被災した多くの人たち・子どもたちに「少しでもほっとしてもらえたら、ふつうの暮らし・心のありようを取りもどしてもらえたら」との思いをこめた支援も、早い段階から各方面で展開された。本の支援もその一つだ。

ここでは主に、子どもの本関係者がたずさわった支援や活動（子どもの本の周辺）をみていきたい。

●子どもの本関係者による支援

まずあげられるのは「現地に本を届ける」支援だろう。この「届ける」ということには、大きく分けて二つ、ないし三つの意味合いがあったように思う。一つは「本・現物を届ける（寄贈する）」。二つめは「読み聞かせなどの活動を通して、本やお話・それを楽しむ（時）も届ける」意味。三つめは「本が読める環境・場所（器）を届ける」意

味。ただ、それぞれが別個ではなく、多くが連携して行われた。

まずは「寄贈」の観点から。

○公益財団法人日本ユニセフ協会では、震災2週間後には『ユニセフ ちゃんな図書館』プロジェクトを立ち上げた。避難所の、ユニセフが設ける「子どもに優しい空間」に、絵本や児童書を詰めたミニライブラリーを設置する活動（JBBYとの連携）。子どもの本の関係者、否にかかわらず、本を支援したいという多くの人の受け入れ窓口となった。

↓30万冊以上集まり、「ちゃんな図書館セット」として、被災地の避難所や学校・保育所、園、また他県などへ避難した個人にも贈られた。仕分け作業等に多くのボランティアが参加。昨年12月で活動を終了。

http://www.unicef.or.jp/kinkyu/japan/2011_1213.htm
○絵本編集者であり、国際児童図書評議会の国際理事も務めた末盛千枝子氏が代表の「3・11絵本プロジェクトいわて」（事務局は岩手県盛岡市中央公民館内）は、被災者に最も近い位置・立場で支援をつづけてきた（JBBY特別